

# 道志村方言語彙の使用に見られる世代差

市岡香代・田 萌・青木葉子・山本友美

## 1 はじめに

本稿は、東京都立大学人文学部平成 12 年度方言学演習にて行った山梨県南都留郡道志村における方言調査<sup>1</sup>の結果報告を目的とする。この調査では、受講生が3つのグループに分かれ、それぞれ方言語彙の使用の地域差、世代差および方言に対する意識について調べた。本班は、道志村の高年層と若年層のことばの違いをみることを目的とし、道志村の方言語彙の使用の調査を行った。本稿では、その結果わかった方言語彙使用の世代差について述べたい<sup>2</sup>。

## 2 調査概要

本班の調査概要は以下の通りである。

調査項目数：62（調査語数 35）

語の抽出方法：杉本編(1996)より、使用に世代差が見られそうな語を抽出し、予備調査の結果をふまえ決定した。世代差をみたかったため、地域的に使用に差が見られそうな語、高年層でも現在使用されていない語は除いた。

被調査者：高年層/高校生/中学生（有効回答数 47/27/25）

調査方法：高年層及び中学生は面接調査、高校生は郵送アンケート方式で行った。対象となる語を含んだ質問文を作り、「～という言い方をしますか」と尋ね、「使う・使わないが聞いたことがある・使わないし聞いたこともない」の三択で回答してもらった。

---

<sup>1</sup>本調査は、同年度方言学演習受講者 11 名（学部生 7 名大学院生 4 名）教官 2 名助手 1 名により、平成 12 年 9 月 2 日～5 日の 4 日間という日程で行った。被調査者は、高年層 50 名高校生 29 名中学生 25 名の計 104 名である。調査方法は、高年層は面接調査、高校生は郵送によるアンケート調査、中学生は郵送によるアンケート調査と面接調査を併用（本稿で扱う項目は面接調査）した。

<sup>2</sup>分析は 4・5 節市岡、6 節山本、7 節青木が行った。

### 3 術語について

分析にあたり、以下のように術語を定義する。

「方言特有語」(27語) = 道志村方言語彙のうち、共通語にはない地域特有の語形もつ語

「共通語同形語」(8語) = 道志村方言語彙のうち、共通語と語形が同じだが、意味のずれや異なりがみられる語

「若年層」 = 高校生と中学生を合わせた総称

「使用率」 = 「使う」と回答した人の割合

「認知率」 = 「使う」あるいは「使わないが聞いたことがある」と回答した人の割合

### 4 方言語彙の使用率・認知率に見られる世代差

本節では、道志村の方言語彙を、語形が共通語と同じか違うかという点に注目して「方言特有語」と「共通語同形語」の二群に分類し、それぞれの語の使用率及び認知率を調べた。その結果、すべての語において高年層のほうが使用率が高いこと、若年層においては、方言特有語だけでなく共通語同形語であっても使用率が高い語と低い語に分かれることがわかった。

#### 4.1 方言特有語の使用率と認知率

図1は、方言特有語の高年層と若年層の使用率及び認知率を示したものである。

図1 方言特有語の使用率・認知率

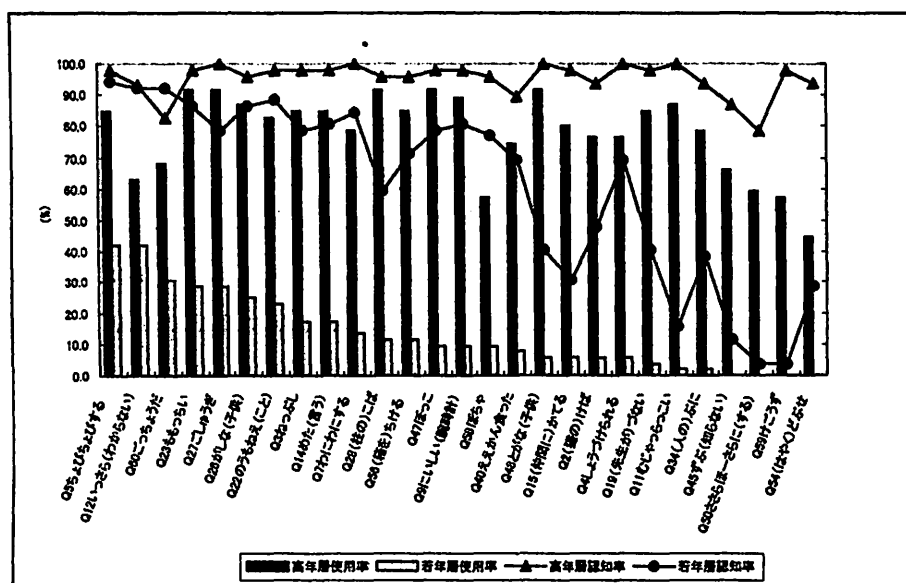


図 1 より方言特有語の特徴として以下のことがわかる。

- (1)すべての語において、若年層より高年層の方が使用率が高い。
- (2)若年層をみると、使用率が比較的高い語と低い語がある。
- (3)若年層をみると、使用率が同じであっても認知率が異なる語がある。

#### 4.2 共通語同形語の使用率と認知率

図 2 は、共通語同形語の高年層と若年層の使用率及び認知率を示したものである。

図 2 共通語同形語の使用率・認知率

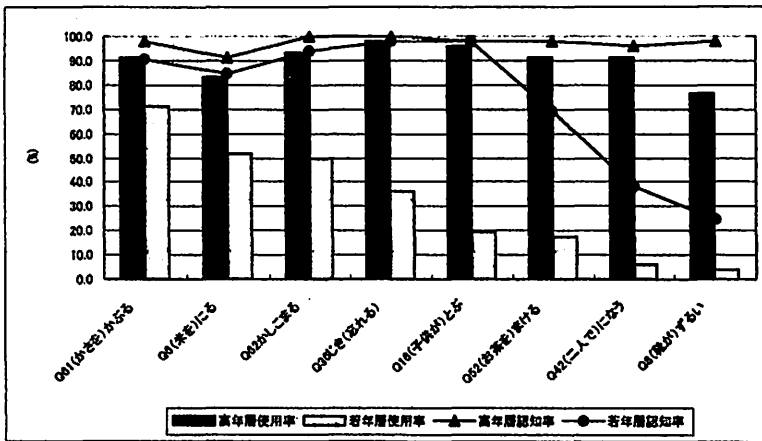


図 2 より共通語同形語の特徴として以下のことがわかる。

- (4)すべての語において、若年層より高年層の方が使用率が高い。
- (5)若年層をみると、使用率が高い語と低い語がある。

(4)(5)の特徴は、(1)(2)の特徴と同じであるから、方言特有語・共通語同形語ともに共通する特徴である。

ここで注目したいのは特徴(5)である。共通語同形語は、共通語と語形が同じなので、世代差がなく両層で使用率が高いと予想していたが、若年層の使用率が高い語と低い語にわかれた。

共通語同形語は、沖 (1991) の「気づかれにくい方言」と同じ特徴を持つ。つまり、共通語と同じまたは非常に近い語形を持ちながら、その意味や用法にずれや異なりを持つ語である。沖 (1995) では「気づかれにくい方言」の使用率を調査している。年齢で高年・壮年・活躍の三層<sup>3</sup>、さらに言語経歴によってネイティブ・セミネイティブ

<sup>3</sup>高年層 (61 歳以上) 壮年層 (41~60 歳) 活躍層 (19~40 歳)

に分けて使用率を分析した結果、ネイティブにおいては全年齢層で使用率が高く、セミネイティブにおいても活躍層で使用率がやや低くなる語があるもののやはり全年齢層で使用率が高いとしている。

今回の調査では、図2に見られるように、共通語同形語でも若年層の使用率の低い語があることがわかった。沖(1995)では、若年層の使用率についてはふれられてはいないが、前述のように活躍層で使用率が低くなる語があることが指摘されている。この点と今回の調査結果を合わせて考えれば、共通語同形語であっても、年齢が低くなるにつれて使用率が低くなっていく語があるということがいえる。

このように方言特有語でも共通語同形語でも、若年層の使用率に差が見られるのは、方言の共通語化という一般的な傾向からいえば当たり前の結果といえるかもしれない。その使用率の違い(言いかえれば共通語化の遅速)を説明できる要因を、さらに調べる必要がある。

## 5 方言語彙の用法別にみられる若年層の認知率の動向

一つの語であっても、複数の用法の認知率の動向に世代差がみられたものがあった。ここで問題とする世代差は、高年層と若年層の割合の差ではない。ここでは、二つの用法がある場合、用法1と用法2における高年層の使用率・認知率の関係と、若年層の認知率の関係の異なりを指摘したい。つまり、高年層では使用率・認知率が用法1＝用法2であるのに、若年層では認知率が用法1>用法2になったりするという点である。

### 5.1 若年層の認知率が低い用法を持つ語

図3は、高年層と若年層の認知率の間に、割合の高低の差はあるものの、用法間で同じような動向を持っている語彙である。

これに対し、図4をみると、図3とは異なり、用法によって若年層だけが認知率が低くなっている語があることがわかる。

図3 用法別 使用率・認知率 (1)

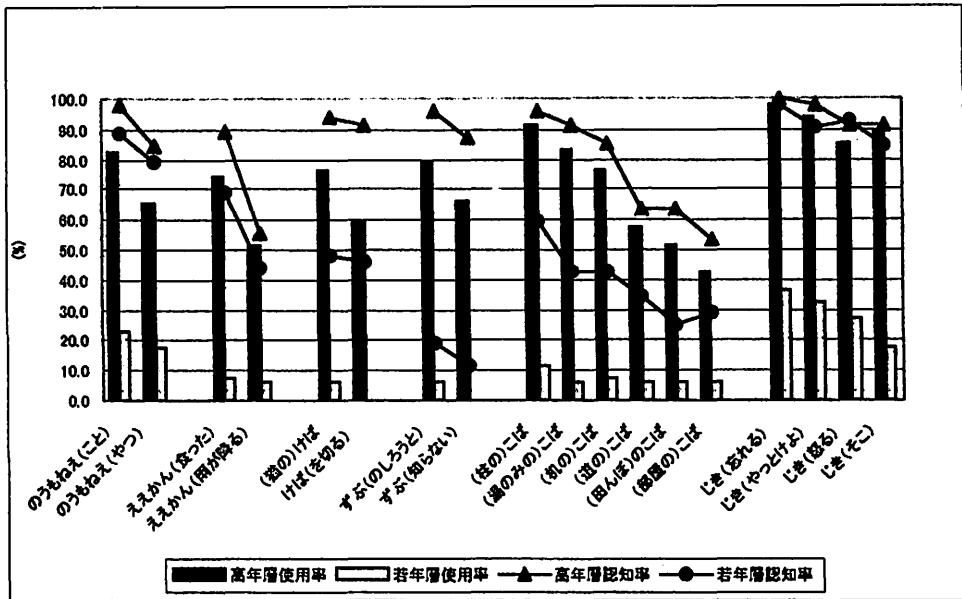
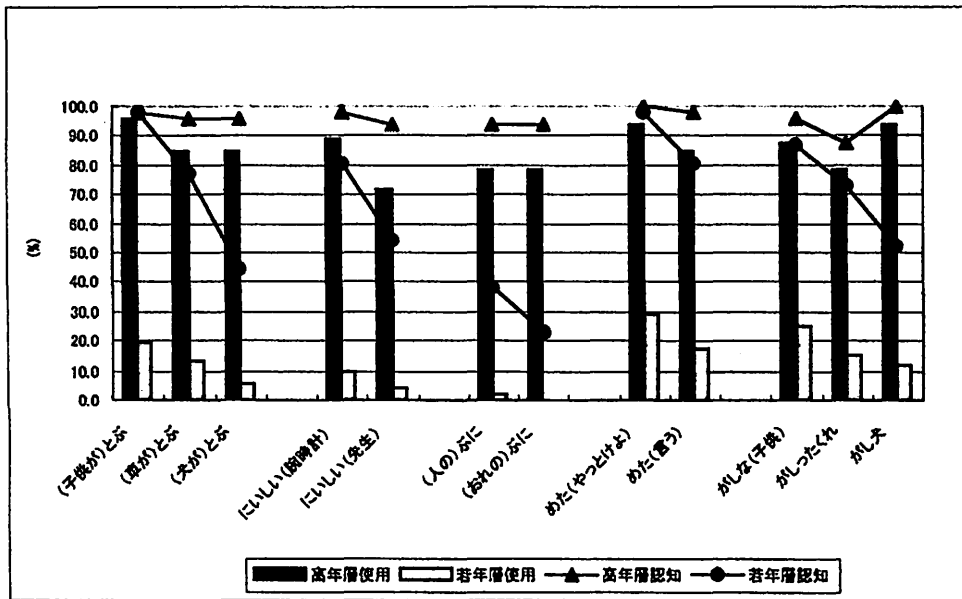


図4 用法別 使用率・認知率 (2)



「とぶ」という語は、道志村では共通語の意味とは別に「走る」という意味を持っている。では、何が走る時に「とぶ」を使うのかという点で、質問文を三つ設定した。

a 子供たちが運動場をとんでいる。

b 家の前の道路を、車がすごいスピードでとんでいった。

c 公園を犬がとんでいる。

この三つの用法の高年層使用率は非常に高く、用法間の差はない。また認知率も高い。しかし若年層の認知率をみると、a 子供 > b 車 > c 犬という用法による違いがみられる。特に、「a 子供」は若年層で非常に認知率が高い。逆に、「c 犬」は高年層で非常に使用率が高いにもかかわらず、若年層の認知率が低くなっている。

「がし」は「乱暴な・行動が悪い」といった意味を持ち、相手の悪い行動を非難するときにする語である。

a あの子はがしな子供だ。

b あのおやじはがしたくれた。

c あの犬はがし犬だ。

高年層では、三用法すべてにおいて使用率・認知率が非常に高い。しかし、若年層では、認知率が「a がしな子供」で高く、「c がし犬」で低くなっている。

このように、高年層では用法間に差がなく使用されている語であっても、若年層では認知率の低い用法を持つ語がある。これらの語は、若年層において、ある用法では非常に認知率が高く、別の用法では低くなっており、その差が大きい。

このようなことは、上記の語において、若年層で認知されている、つまり聞いたことがある用法が減っていることを示している。語そのものの認知率はある特定の用法によって維持されているが、それ以外の用法は認知されなくなっているといえる。

## 5.2 高年層に比べ、若年層の認知率が高い用法を持つ語

図5 用法別 使用率・認知率 (3)

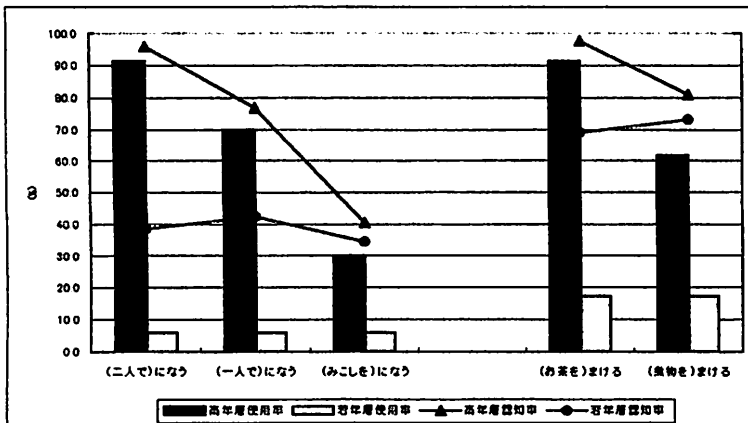


図5は、高年層の使用率が低い用法を持つ語である。注目したい点は、高年層では、使用率の低下とともに認知率も下がっている用法であっても、若年層の認知率が下がっていないことである。

「になう」は、「あるものを持つ」という意味の語である。

- a 長机を二人でになった。
- b 箱を一人でになった。
- c みんなでおみこしをになった。

高年層の使用率をみると、a・bに比べcが非常に低い。認知率も同様である。しかし、若年層では、a～cの認知率は変わらない。

これらの語は、高年層はその用法の違いを判定しているが、若年層においては、語そのものの使用率が低いために、用法の違いの判定ができなかった語であったのではないかと推測できる。

### 5.2.1 「になう」について

今回の調査で「になう」について質問したかった点は、「になうは物を持ち運ぶときに使うが、人数によって制限があるか」ということであった。しかし、「物を担ぐ」といった場合に「になう」を使う地域があり、質問文cでは問いたい点が的確に問えなかった。

「物を担ぐ」場合に「になう」を使うか使わないかという点だが、『日本言語地図第2集』では、道志村地点は「材木・天秤棒・二人で天秤棒」のいずれの場合も、「かつぐ」となっている。山梨県全域や隣接地域も同様である<sup>4</sup>。このことと今回の結果から、道志村ではcのように「物を担ぐ」場合には「になう」を使わないということがいえるだろう。

『日本方言大辞典』には、「二人で荷を動かす」「物を持ち運ぶ」場合に、「になう」を使う地点も報告されており、道志村でも同様の意味で「になう」が使われているといえる。今回の結果をみると、高年層の使用率・認知率ともに、aよりbの方が低くなっていることがわかる。持ち手の人数による使い分けははっきりとはわからなかったが、一人で抱えて運ぶというより、二人で抱えて運ぶといった用法のほうが、より多く使われているようである。

---

<sup>4</sup> ただし、一地点（東京都西多摩郡）だけは「かつぐ」「になう」が併用されている。

## 6 語彙の使用率に見られる個人差について

本節では、道志村の方言語彙の使用を個人別に見ていく。その結果、高年層も若年層も方言語彙の使用に個人差はあるが、その差は若年層のほうが大きいことがわかった。若年層では、特定の語を多くの人が使っているのではなく、特定の人が方言語彙をよく使っているという特徴が見られた。

### 6.1 若年層の特徴

表1 中学生個人別使用率

話者No	使用率(%)	話者No	使用率(%)
301	41.9	316	22.6
302	17.7	317	11.3
303	37.1	318	12.9
304	16.1	319	11.3
305	14.5	320	3.2
306	6.5	321	1.6
307	3.2	322	3.2
308	8.1	323	17.7
309	19.4	324	16.1
310	0.0	325	8.1
311	4.8		
312	40.3		
313	38.7		
314	59.7		
315	8.2		

表2 高校生個人別使用率

話者No	使用率(%)	話者No	使用率(%)
201	4.9	216	45.2
202	4.8	217	6.5
203	9.7	218	30.6
204	0.0	219	8.1
205	6.6	220	11.3
206	11.3	221	12.9
207	11.3	222	17.7
208	35.5	223	3.2
209	6.5	224	0.0
210	6.5	225	8.1
211	8.1	226	0.0
212	3.2	227	9.7
213	17.7		
214	6.5		
215	12.9		

表1は中学生の方言語彙使用率を個人別に示したものである。これを見ると、中学生の方言語彙の使用率には非常に個人差が大きいことがわかる。使用率の最低と最高の間には約60%もの差がある。

認知率も含めた回答一覧を見ると、「使わないし聞いたこともない」と答えた数よりも「使う」あるいは「使わないが聞いたことがある」と答えた数が多く、ほとんどの方言語彙が中学生にも理解されていることがわかった。

しかし、表1の結果より、ある特定の語が多くの人に使われているというわけではなく、ある特定の人が複数の語を「使う」と回答しているということがわかる。つまり、方言語彙は中学生にも理解されているが、実際に使うのは一部の特定の中学生であるということがいえる。

このように中学生は方言語彙使用率の個人差が大きいということがわかったが、この個人差が祖父母との接触に関係があるのかどうかを調べるために、祖父母との日常の接触について尋ねた結果と合わせて分析してみた。しかしその結果、ほとんどの中学生が祖父母とほぼ毎日話しており、方言語彙を使う人だけがよく祖父母と話をす



ということにはなかった。そのため、方言語彙の使用と祖父母との接触には関係があるとはいえない。

次に、高校生の方言語彙使用率（表 2）をみると、中学生に比べて、全体的に使用率が低いことがわかる。しかし、高校生も、中学生と同様に個人差が大きく、特定の人が複数の語を「使う」と答えていることがわかった。

また、高校生は現住所によって、村内在住と村外在住に分けて分析してみたが、特に差はなかった。祖父母と話すか話さないかも、中学生と同様に直接関係していなかった。

## 6.2 高年層の特徴

高年層の回答結果も、若年層と同様に個人差があったが、やはり若年層よりも使用率が圧倒的に高いので、その個人差はあまり目立たない。また、使用率があまり高くない語でも、認知率は高いので、ほとんどの語彙が理解されているようだ。

## 7 品詞による高年層と若年層の違い

本節では、方言語彙を品詞別に分類し、高年層と若年層の使用率に見られる世代差を示したい。

### 7.1 若年層使用率の特徴、

図 6～9 は、方言語彙を品詞別に①名詞②動詞③形容詞・形容動詞④副詞の 4 グループに分け、高年層と若年層の使用率を、若年層使用率の高い順に示したものである。

若年層使用率を概観してみると、名詞ではほとんどが 20%以下の低い値に留まっているが、形容詞・形容動詞では 30%程度のもの、副詞では 40%程度のものが現れ、そして動詞では若年層としては非常に高い値をとっているものがいくつか現れているのがわかる。Q61「(かさ)をかぶる」は 70%を超えていて、Q6「(米)にる」、Q62「かしこまる」、Q5「ちよびちよびする」も 40%を超えている<sup>5</sup>。名詞が、このように若年層で全体的に低い使用率をとった要因として言えることは、名詞で示される物事は時代の変化とともに消滅しやすいため、それらを指す語も影響を受けやすいということである。例えば Q59「けごうず」は馬にあげていた米の研ぎ水のことである。

---

<sup>5</sup>若年層の使用率全体で 40%を超えたのはこの 4 例と副詞の Q12「いっさらわからない」のみである。

図6 名詞使用率

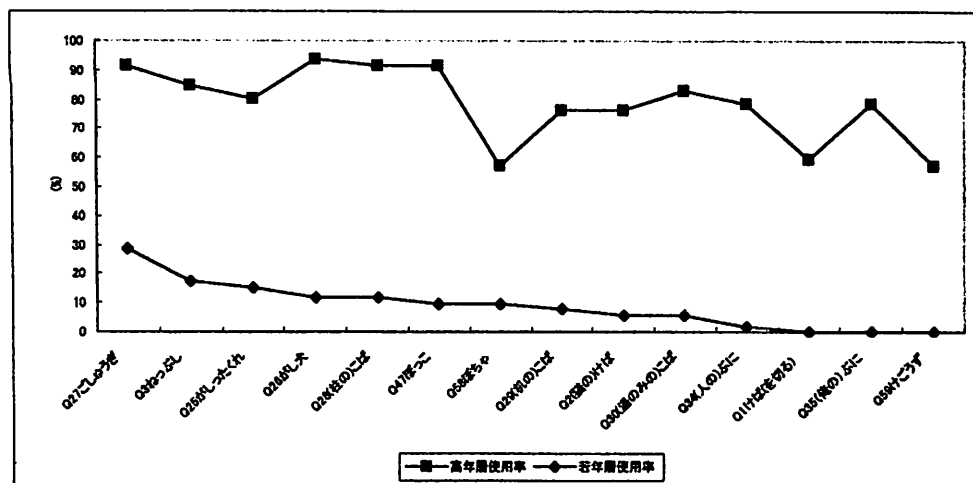
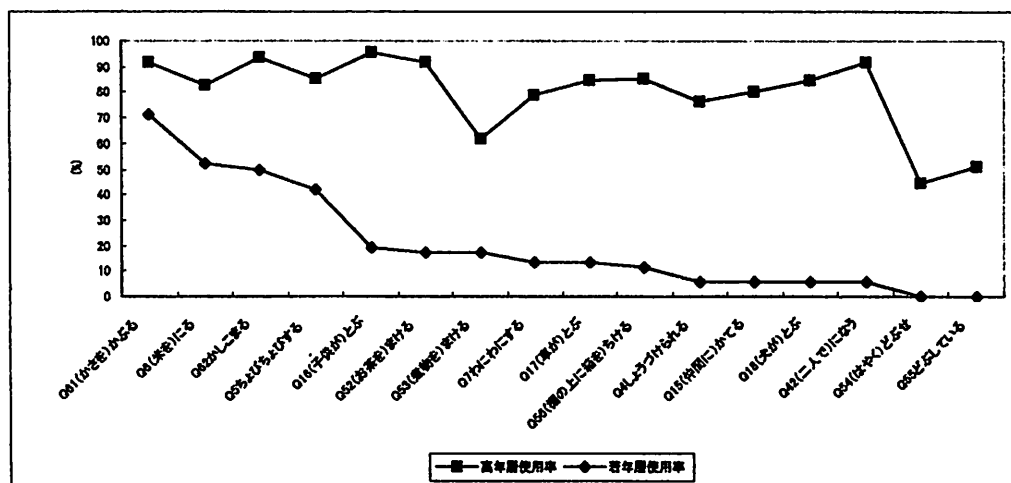


図7 動詞使用率



が、現在では馬を移動手段とする家庭がなくなったことから馬の数も減り、結果として「けごうず」も消滅したため、若年層にとってこの語はなじみのないものとなり、使用率0%という値となって現れたのではないかと考えられる。

それに対し、高い若年層使用率をとる語が名詞以外の品詞に現れたのは、これらの品詞が示す概念が、名詞に比べて消失しづらいためであるのだろう。

また、動詞で若年層使用率が40%を超えた4つの語彙のうち、はじめの3つは共通語と語形が同じであることを考えると、共通語と同形の語は高い使用率をとりやすいということも関係しているようである。ただし、先に示したように、若年層では共通語同形語だからといって必ずしも使用率が高くなるわけではない。地域特有の語形

図8 形容詞使用率

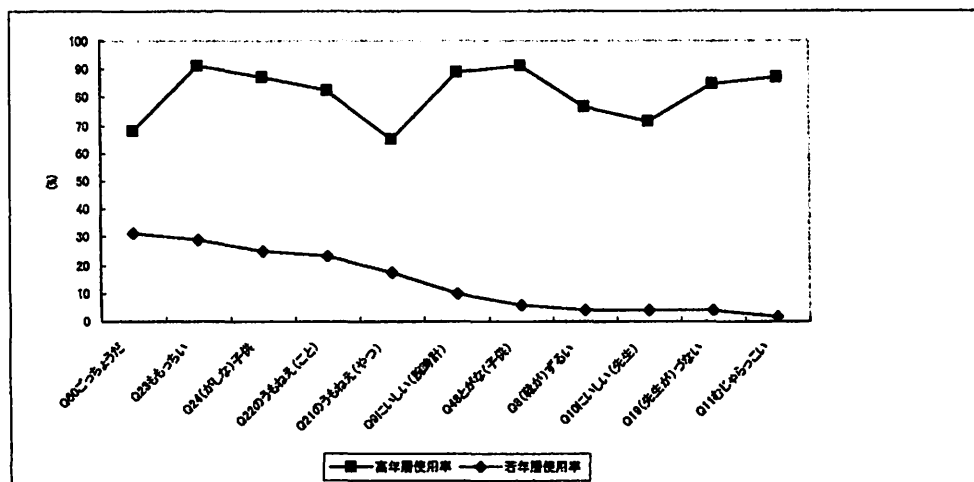
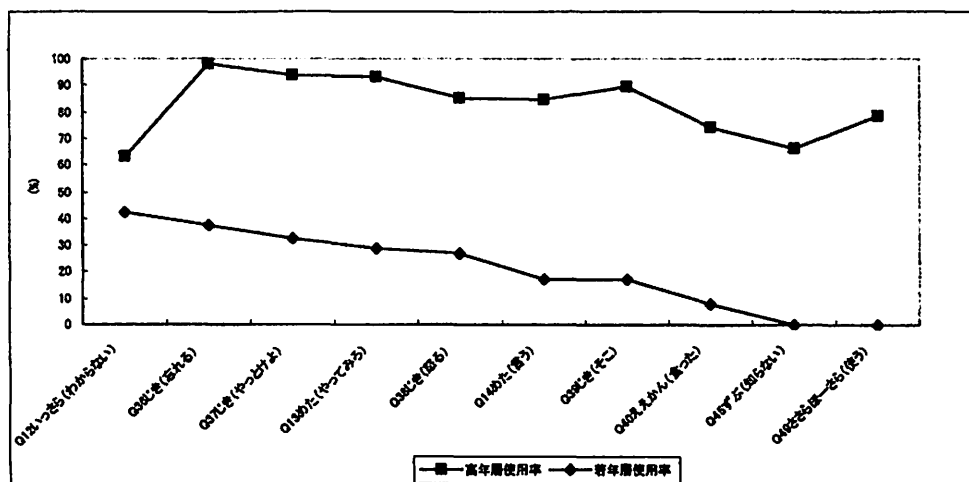


図9 副詞使用率



である Q5「ちよびちよびする」の若年層使用率が 42%という高い値であるにもかかわらず、共通語同形語の Q16「(子供たちが運動場を)とんでいる」の若年層使用率はたった 19%である<sup>6</sup>。

また、若年層で比較的高い使用率を持つ語彙が、高年層でも高い使用率を持つとも言いきれないことが図 6～9 からわかる。形容詞・形容動詞のグループで最も若年層使用率が高かった Q60「ごっちゃんだ」の高年層使用率は 68%であり、形容詞・

<sup>6</sup> Q16 の高年層使用率は 96%である。これは動詞の高年層使用率のなかでは最も高く、全品詞の高年層使用率のなかでも 2 番目に高い値である

形容動詞の高年層使用率のなかでQ21「のうもねえ（やつ）」の65%に次ぐ低い値を示している。副詞にいたってはより顕著で、副詞のグループで一番若年層使用率が高かったQ12「いっさら（わからない）」の高年層使用率はたった63%である。これは副詞の高年層使用率のなかで最も低い値である。

## 7.2 「ずぶ」と「いっさら」について

図10 Q12「いっさら」とQ45「ずぶ」の高年層回答

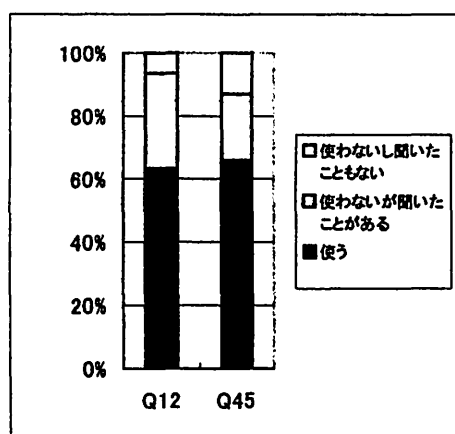
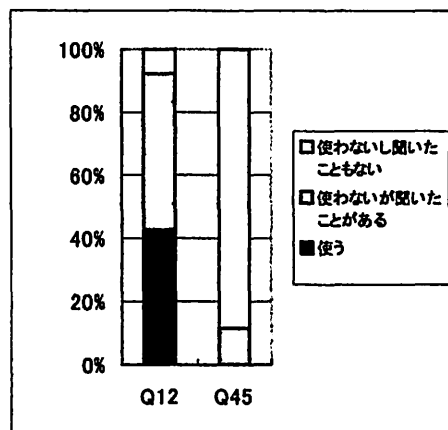


図11 Q11「いっさら」とQ45「ずぶ」の若年層回答



前節でも述べたように、副詞で最も高年層使用率が低かったのはQ12「いっさら（わからない）」(63%)で、ついで低かったのはQ45「ずぶ（知らない）」(66%)であった。「いっさら（わからない）」も「ずぶ（知らない）」も打ち消しの語を伴う副詞「全然～ない」の表現であるという点で非常に類似していると言えるが、高年層では使用率にあまり差がないにもかかわらず、若年層では42%と0%という全く違った使用率となっている。認知率を見るとさらに極端な差が現れる。高年層認知率が「いっさら」: 93%、「ずぶ」: 87%であるのに対し若年層認知率は「いっさら」: 92%「ずぶ」: 12%となっており、若年層と高年層では大きく傾向が異なっている。

高年層の個人別回答を見ると、「いっさら」も「ずぶ」も両方「使う」と答えたのが23人、両方「使わないが聞いたことがある」と答えたのが4人、両方「使わないし聞いたこともない」と答えたのが1人となっていて、この二つの質問で回答が一致している人の割合はほぼ60%になる。

「ずぶ」は『日本国語大辞典』によると「まったく。まるっきり。」という意味で洒落本、滑稽本等に現れているようである。『日本方言大辞典』では「全く。全然。まる

で、すっかり。」という意味で日本各地の用例が出ている。道志村に近い東京都八王子市や静岡県だけでなく北は山形県から南は福岡県まで載っていて、非常に広範囲である。これらのことから、「ずぶ」は古くから全国的に使用されていて、現在でも方言として各地に根付いているのではないかと推測できる。

これに対し「いっさら」は『日本国語大辞典』にも『日本方言大辞典』にも山梨県と長野県の用例がわずかに挙げられているのみである。したがって、「いっさら」は山梨県と長野県でのみ使われる地域的な俚言であるといえるだろう。

「いっさら」と「ずぶ」のどちらが古くから道志村で使われていたのかは分からないが、若年層で「ずぶ」の認知率がたったの12%であることを考えると、「ずぶ」は道志村ではもう消え去る寸前であるらしい。

物事や観念の消滅によってそれを指し示す語が消滅した例は前節で挙げたが、この「ずぶ」の消滅は、観念自体は依然として存続しているのに語だけが消滅し、別の語が取って代わるという場合の例であるといえる。道志村では「いっさら」と「ずぶ」のどちらも高年層使用率が高年層としては低かったため、この二つの語に取って代わる表現が既に何か存在しているのではないかと考えられる。

## 8 まとめ

道志村の高年層と若年層の方言語彙の使用を調査したことにより、次のようなことがわかった。

- A. 地域特有の語形を持つ語の場合、高年層の方が若年層よりも使用率が高く、語によって若年層の使用率が高いものと低いものがある。同様に、共通語と同形の語形を持つ語であっても、高年層の方が若年層よりも使用率が高く、語によって若年層の使用率が高いものと低いものがある。
- B. 語の用法別にみると、高年層ではすべての用法で使用率が高いにもかかわらず、若年層では用法間で認知率に差がある語がある。また、若年層は、使用率が非常に低い語の場合、用法間の違いが判定できない可能性がある。
- C. 個人別の回答をみると、若年層では、一部の特定の人が複数の語を「使う」と答えているという特徴がある。
- D. 品詞別に若年層使用率をみると、名詞では全体的に低い使用率をとっているが、副詞や動詞では比較的高い使用率をとるものもあった。

## 参考文献

- 大橋勝男 (1976) 『関東地方域方言事象分布地図 第三巻語彙篇』 桜楓社
- 沖裕子 (1991) 「気づかれにくい方言—アスペクト形式「～しかける」の意味とその東西差—」『日本方言研究会第 53 回研究発表会研究発表原稿集』日本方言研究会
- (1995) 「「気づかれにくい方言」の隆盛と俚言使用の二相化」『変容する日本の方言 (『月刊言語』別冊)』大修館書店
- 国立国語研究所編 (1966) 『日本言語地図第 1 集』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編 (1967a) 『日本言語地図第 2 集』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編 (1967b) 『日本言語地図解説 各図の説明 2』大蔵省印刷局
- 杉本賢二編(1996) 『道志の方言・俗語集』私家版
- 永瀬治郎編 (1988) 『山梨県言語地図集』専修大学出版会
- 深沢泉(1979) 『増補改訂 甲州方言』甲陽書房

## 付記

調査にご協力いただいた道志村の皆様にご心より感謝申し上げます。本稿の 4・5 節は、東京都立大学方言学会第 224 回研究発表会で発表した内容の一部に訂正・加筆したものである。(発表は「山梨県道志村調査報告」として市岡香代が、梁井久江・博多理恵(共に東京都立大学大学院生)と共に行った。) 発表の際、ご教示くださった皆様にお礼申し上げます。

(いちおかかよ・東京都立大学大学院生) (でんもえ・東京都立大学大学院生)  
(あおきようこ・東京都立大学学部生) (やまもともみ・東京都立大学学部生)